

長吏となつたを、延文四年十一月十九日と記してゐる。

**チヨウセンイン** 長泉院 大聖寺藩主第六代前田利精の側室某の法號。

**チヨウセンジ** 長專寺 鹿島郡笠師に在つて、眞宗東派に屬する。初は土川にあつたが、天保十四年今の所に移つた。

**チヨウセンジ** 長泉寺 鳳至郡曹洞宗總持寺の山内に在つて、明應三年雲山の建立とし、同山内普藏院に屬したが、今は廢絶した。

**チヨウゼンジ** 長善寺 鹿島郡大町に在つて、眞宗東派に屬する。

**チヨウセンジン** 朝鮮人 朝鮮役の時我が軍の伴ふ所となり遂に金澤に來たものは、脇田直賢があつて、祿千石に登つたを首とし、小川久次・金子萬右衛門・市村清六・高麗孫三郎・成瀬小八郎など、皆姓名を變じ前田利長に臣事した。その外に永天齋は名を七右衛門と稱して豆腐商人となり、名倉不亂は外科醫となつて利常に仕へ、祿百石を賜はつた。

**チヨウタカツラ** 長高連 加賀藩の老臣長氏第五代。實は第四代尙連の弟連房の二男。元祿十五年三月七日生。通稱榮之助。文三郎。九郎左衛門。元祿十六年十二月六日尙連の後を襲ぎ、遺知三萬三千石（内與力知二千石）を受け、享保十四年十二月六日從五位下甲斐守に任ぜられ、二十年三月廿四日三十四歳を以て卒。法號初め大雄院、後大雲院。野田山に葬られた。

**チヨウタネツラ** 長胤連 通稱新左衛門尉、後伊勢守。正平八年（文和二）九月能登國得田次郎左衛門入道素重代子息齋藤六重房の軍忠狀に、同年八月廿八日大將吉見修理亮が能

登島に發向し、廿九日長新左衛門尉胤連の館に押寄せて之を燒拂ひ、金頸城に追籠めたとあり、正平十年（文和四）七月天野安藝守遠政代堀籠六郎左衛門尉宗重の軍忠狀には、同年三月十七日長伊勢守胤連の金頸城に押寄せ、六月十四日之を追落したとある。胤連は宮方であつた。

**チヨウタムジナ** 長太猪 文政四年十二月十五日、鳳至郡大澤村の百姓五左衛門の弟で、木挽を業とする廿三歳の長太は、いつも山中の小屋へ長太を呼出しに來る老猪と格闘して之を殺した。後長太は大澤から一里を隔る太平谷で製炭に従事してゐたが、先に殺された猪の妻が來て仇を報いんとしたので、法會を營んで難を免れたと傳へ、『長太居るか。居るが何ぢや。三年先の夫のかたき。』なる童謡が、金澤でも明治の初まで行はれた。併し當時の届書にその殺したのを理として居り、仇を報じに來たことの文獻は未だ之を見ぬ。

**チヨウツグツラ** 長續連 通稱新九郎。九郎左衛門・對馬守。初諱勝重。平加賀盛連の二子で、長英連の養子となり、永祿八年家をその子綱連に譲つた。天正五年上杉謙信の七尾城を攻めた時、謙信に内應した遊佐續光は降を綱連に勧めたが、綱連は之を容れなかつたから、九月十五日續連をその邸に招いて自殺せしめ、又綱連を遂に要して掩殺した。

**チヨウツナツラ** 長綱連 初諱重連。通稱九郎左衛門。永祿八年父續連退隱の後を受けて、畠山義隆に仕へたが、天正二年遊佐續光の義隆を燒殺した時、義隆限するに臨み遺孤義春の擁立を託した。四年上杉謙信の能登に侵入するや、綱連畠山氏の爲に畫策する所あ

り、五年熊木城の齋藤帶刀を陥れ、次いで穴水城の長澤筑前を攻撃したが、七月その圍を解いて七尾に籠城し、後に九月十五日續光の爲に殺された。法號怡岩院大雲良悅。↓チヨウツグツラ 長續連。

**チヨウツラアキラ** 長連朗 通稱中務。長連龍の家臣。慶長五年八月能美郡淺井駿の戦に、丹羽長重の士古田加兵衛の爲に討取られた。

**チヨウツラオキ** 長連起 加賀藩の老臣長氏第七代。實は長采女連安の嫡子。享保十七年十二月五日出生。通稱右膳・津五郎・三左衛門・九郎左衛門。善連の死に臨み嗣となし、寶曆七年三月六日家を襲ぎ、遺知三萬三千石（内二千石與力知）を受け、安永三年十二月從五位下大和守に任ぜられ、寛政十二年二月十九日致仕して惠迪齋と號し、隱居領二千石を賜ひ、同年十月十四日六十九歳を以て卒した。法號惠迪齋。金澤開禪寺に葬られた。

**チヨウツラカタ** 長連賢 一に連重に作る。通稱九郎左衛門。頼連の子。足利義持の頃の人。長家家譜には、この連賢に當るものを名不詳としてゐる。

**チヨウツラサト** 長連郷 通稱右膳、後九郎左衛門。甲斐守連愛の弟で、その養嗣子となつたが、文化八年五月朔義父に先だちて歿した。行年三十七。連郷字は李晦、號は蘭林。宋學を好み、格知の説を口にし、恭謙節儉、富田景周に師事してその交最も深かつた。

**チヨウツラタツ** 長連龍 加賀藩の老臣長氏の家祖。通稱萬松・九郎左衛門。初諱好連。續連の二子で、天文十五年八月十五日を以て生まれ、幼にして臨濟の門に入り、宗顯と號し、鹿島郡熊木定連寺に學を修め、後に池崎孝恩寺に住した。連龍の戦功を立てた最初は、天文五年兄綱連と共に、穴水城に居た越後の將監浦長門を攻めてゐた時、七月十八日甲城の越將豐田肥後・唐人式部が漁舟に乗じて赴援したのを、乙ヶ崎の山陰から急に現れて破つたにある。當時連龍は尚法鉢であつたが、身に甲冑を着けず、白帷子を纏ひ竹笠を戴いて戦つた。閏七月上杉謙信再び來つて七尾城を圍み、廿三日城・畠山義春疫疾に罹つて歿した。綱連乃ち連龍を織田信長に派して援を請はしめんとし、連龍は直に發した。然るに續連・綱連等は九月十五日遊佐續光の爲に害せられて、織田氏の軍が七尾を救はん爲加賀に入つた時には、彼等の首級が石川郡倉部濱に鼻せられてゐた。是に於いて織田軍は既に時機を失したとして引上げ、爾後連龍の懇請に拘らず出兵しようとしなかつた。連龍乃ち北庄に下り、柴田勝家の援を求めたが、亦聞かれなかつたので、自ら浪人を募つて五百餘を得、別に伊久留了意を能登に遣はして同志を糾合し、六年八月船を越前三國に懸して羽咋郡富木に上陸した。時に穴水城の越將長澤筑前は珠洲郡正院の一揆を平定せん爲出張し、白小田善兵衛のみ留守したから、連龍は容易に城を陥るゝを得た。長澤筑前・平子和泉等之を知つて大舉來り攻め、連龍は屢城外に出で、月崎・強盜塚・新崎・榎木・鶴川・内浦・出浦等各地に會戦したが、外援の至るものなく、城中亦糧食缺乏したから、一たび媾和せんと欲し、十月廿一日七尾城に鯉坂長實に會し、その夜法幢寺に宿した。然るに敵の來襲を報ずるものがあつたから、連龍は逃れて石